

独自開発の生産管理システムを活用し、 「魅せる製品」提供を目指す

梅田工業(株)

精密板金や機械加工を手がける梅田工業（埼玉県行田市）では1995年に、独自の生産管理システム「F.P.I.sys」(図1)を開発した。同社は1947年に、埼玉県熊谷市でモータ変圧器の設計・製作・販売を目的に創業。その後、プレス部品の製造やプレス金型の製作、など業務を拡大してきた(写真1)。この一連の歴史の中で、「F.P.I.sys」を開発したが、自社だけの活用にとどまらず、外販も行っているという。

自社に合う生産管理システムが見つからず、自社開発を決断

そもそも、同社が専門でもないシステム開発に乗り出したのはなぜか？ それは、試作から金型製作、量産と業務の範囲が広く、これに伴い製品の種類や受注ロットサイズがまちまちな事業環境

にあった。「F.P.I.sys」開発前の同社は、オフコンを使って受注処理から工程進捗の管理までを行っていたが、受注製品の種類が多くなってくると顧客、製品、材料マスターの登録を始めとした手続きが煩雑になってきた。そこで、バーコードシステムを導入して各工程に端末を設置し、作業の着工と外注管理を行うようにした。その結果、進捗管理は手続きが簡単になったが、作業者の入力忘れや漏れがあったり、実際の作業との間にタイムラグが発生するなど、必ずしも正確な情報が把握できた訳ではなかった。

それに、1カ月に受注する製品の種類が膨大だけでなく、ロットサイズもばらばら。実績データを元に決めた標準作業時間をベースに、各工程の負荷を山積みしても、負荷のバランスを取りながら山崩しができないでいた。

このような事情から、当時社長だった梅田耀敬(てるゆき)氏(現会長)が「F.P.I.sys」の構築を決定する。



図1 「F.P.I.sys」メニュー画面



写真1 工場内の様子